花五十三駅 後編 六

宮城塾用

時へ13
1301
三/

特
へ3
1301
11

吾嬬下五十三駅後編巻之六

第十七版

大磯の巻

[illegible]

[illegible]
義の行末をとゝこび笑ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

の正家と求め孫たちと若干日日を小車の
ゆくへ勝ゲ業々ゆくれ関きこ時々を行脚めくく孫たちく
中義雪友仕弼さ せぬ糸車嗚ゝ お肩ゲたちまちく
モウよーにあさんせ所んにはしの日の縁りさ行絵の
幸もさぬ内ホモウ さ元ゲ又人ゆくるつさドレ所対て
夕食の支度でもちうちうと車所ゆせ立よるわゝも
形ふぐもくとねぐら求むる鳥の智義雪風と耳と
澤方ふりうつこ鳥の呼聲そまに行申う絵さうぐ若や
丈のお方のよくとうを打消を孫たちつ又そんるうひ

ぜ一て家に拵ゲもい庶の毒ろも鉢ゑ呼鳥変さ
ゆでいぶぐりませんとそれ旅わうう表の方農所の
百姓ども世界稼ゆ方仕ー八ウそれの動方風絵会
の呼吸さうフウ絵会の居るそんばさうそや
呼のみくうの猫方中狗仏今夜又捕ゑまさ方門て
由斗ゲ度で刑罪よのうちゆうちのゆと智ちゆめ
絵りつ行ちると呼孫たち義雪をうつくんちうう
くコレ孫たち今の性ーの形ゆでん丈の四方の一ばの
コリヤマアどよせうくとうち所うゆとたせる方

おもはずでおぢうまれたるみぢかう見ぬ時とは思ふの
時なる事でもおぢうまうをまへ「イヤくそまいそよでも
あまでとり」けるが孫のうべ責てい丈のうたのうの
一目をこの孫たちう今ようう変ってこゝろへそを面白
涙と申ういよ丈へ情よどふぞ連れくを生てくく
おろく涙孫たちうも表うへ屋敷新ふいひのをとい
をおぼ老の事の時りとれるもぐどうしくそんのう
今ようむ家を友つまてれくたりるう「サアおぢ丈と
あこれませ」こく系へとそうくふ丈爰潮へ孫たちの

たちの花家をけよとそれくてそを出そん

○第十八段

平塚の宝

叔も孫たちを花家をを伴ひくを出つ者ぐとすれど
たちどもの老と女の長弱のまぶ乃の平塚も海岸の
中うふりそまて彫並へ花撫ちを
海辺寺の孫もおぢ凄く若根おぢのふ秋おぢ
花家を姫へ一番よ文とやりへ家力ふ乃の孫家さ
ろーさもたちさまさ立まを一ん丈歩れゆくてのれた新

脇しやひらく陰火の光りの丸るまりぞろと稼元分
風ふきひ風の冷寄りにかるふ見元脇ちめく行んと
ちまび行ちめく行へ引ちく後ろ髪ふちめくかろ
ちまび後ふちろくと女の姿やゝおまへいお辰ねどふ
ちろく変へとゝふ新をだろと丸結く脇ゝげこどふ
ちてちふ新星ねりりやあんやりでおぞんちろう大
事のく男を寝元おまへい嫁ゝうちんちろうが
はお辰いちまゆへふ非業の丸の者と消へ今こ源
ひ流あゝぞゝて寄ゝく居ちまちゆへ行ぞを

ちゝと光新ねふ寄び逢ちまいのゝいろちゝく
寄ゝへせねとちろゝと白服眼ちのまるどりアッと行
ふ新星嫁ちを辰どちを休まろぶ孫ちろお驚ちゝ中ゝ
己い嫁のお辰ぞる嫁ぬのちこ三化こお果されゝと
皆ろろこ物も粗忘失中ろで切仲ちく也嫁新ねを
脇ませ寄る不屋中ろ目こお丸せんといいさねふ力
引ちさ切拂へば形ちい消ろく先ころろ孫ちろい花園
をゆけ記ゝて「コレヤ新星おおきを結こちあられま
せと侍への清水汲ちくりこ注ぎつはせろ成抱を

あさぐろの
牧方潟惑
典照を
威ーて
今代元
岩

音長ノ巳

きびむ宮殿中うくにん付孫たちうゑ和ゑの「オ、お兄
が付は」ちうモウ歌ゆよ万もおぐりませぬおきと
丈丈ふお指おぐせとりの円背る八聖の霧晃宮をも
きを元垂して孫たちつよ明けらき猛舎へて考ぐ
たまき

○第十九段

義沢の巻

乗院天日坊い聰明英智と世へる竜志を嗜く
係くく下業こせしふ係く侍り威を本一勢へを
めひて既ふ猛舎よ考ゑれば指富ゑい延福蓋を深

被し幕を打せ伊川伊賀ゑ毎四法を以て時の奉行
ゑ物と共げ牧教々の四財教行ゆ中ゑりとそ云へ
ゑ猛舎の法を行ゑ中ふ信し中ふ親ひ評議遍く
ゑりゑるが牧教々の四門法として当時明月の宴へ
行る大江廣元ふ命ぜゑ中ふ天日坊の実否を糺し言
上せしとゆゑ中ふ廣元ふ御ゑ君命を受く
実否を改だん天日坊を指さ考てそ云ふ物を糺さん
と考ゑくそ日を定めゑゑ既ふ定めの日となゑんれば
廣元の鍛ゑ人掃除も狂ゑ云と入天日坊殿の四入と

紙子袴なく表の方天日坊が女房赤星典膳それ
と見るより門和と出迎て法士ふ典膳が一礼はして
門内へのうんとする袴よりも付来る若者ばり一人の
男が赤星の袖と扣へて「モシ赤星様袴を付て下
さいは」「ヲヽそうや後と付て来ろ子、奉尽とも
紙子に今暫く御待申さ「待て居ろといつてさて
いつ袴の付ようそれよりい今夜でといつの出来い
の袴ら宮参めく「赤星氏あまい何者でおざりやん
「子何オヽそれなくあまい若者が手ろ人が百俵つさ

来でおざるう高時みみ和ろるなく戸ノ体ようろ
ちさ也今方ちくくまとのの生屋方ろいお稚ひ
なく天日坊殿しま紙なく「お入の時刻ゑまびえく
お入ゑま「ちくびはそれと法士い殿ら民入り
ろう紙ろ典膳ろう丸臣「子ろれもたろけさ奴でい
ある丸者しい形ぐ居ようふよう天日坊殿の中屋敷に
ゑろうさ人ちまびゑ生ゑ生ゑ殿ごろいてろ入ようる武
士ふゑろぬう「イヤモウ武士い古殿ひ何の何ゑ家といい
まゑより中ろう軒旁の海苔で踏ろ殿稚び踏

ふるく扨爲「さつつア丁ど三十五見じやア又一
結ひ弘ゐ雅よおぐりやん、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ
ゐ「書うまゝ」と源義い一義ふ元ゐ紀ゐ紀を
つく赤早典昭門の門つぞ入ゐ行ゐ行ゐ行ゐ行ゐ行ゐ天
日坊行列扨へ出来う先ゐ乞りの行ゐ行と岩ゐ門義
ゐ奥へ西じて表門八文字に押開ノ〳〵天日坊いゐ歌ゐ
ゐく泗代の紋ゐ和去国へ横結ゐ舞ゐ屋ゐ也西ゐ元ゐ白ゐ
立い後の衣ゐ也ゐ後ゐ水見の珠数ゐ流ゐく般若湯と廻
日と二ゐ紋ゐ戴せ数ゐく数先ゐく扨ゐく行ゐ西ゐ元ゐ

[illegible]より給へ　和軍奴腦も共に[illegible]
一ツの門へ入ると[illegible]人大江廣元い大紋衣帽子
羅甲ると天日坊の来るまで出さじ[illegible]と上代
ふ郷へ何と云ひ[illegible]そまへ後らせめひしの天日坊成りて
まゝ[illegible]系ひい系ひくも經俊の[illegible]と為う
て今日君代を入まる大江同腦も廣元ゝそゝ[illegible]
扨も大江廣元よる予が面おそも帰りて[illegible]
[illegible]礼如抜ひきくとさめ[illegible]「イヤ[illegible]
りゝ行かゝ「さまべい系ひくも右幕下の[illegible]

命と為りて君の[illegible]より[illegible]「[illegible]」めひしの今
日に[illegible]生の不細妻しく形り又[illegible]短刀の[illegible]
[illegible]と[illegible]上[illegible]君を[illegible]
の[illegible]代[illegible]
「[illegible]スリヤ[illegible]ぬとやコリヤ同腦も[illegible]
[illegible]ひ[illegible]き右幕下の[illegible]
[illegible]君[illegible]代文でも[illegible]
[illegible]文[illegible]「[illegible]
殺[illegible]廣元[illegible]と今日[illegible]

ゑとして又君の上席たるべき「サアそなたい」「サアくさ
いてくまして遠の天日坊殿の南拵ふ給ふ方なくさんと
ちきい来早典膳や、江戸表みてい「イヤく若しう
あい又の名代となるべき江戸表をと静くと来
たりてそこに居直りて長崎奉行を
きび上座に免扱同じ事なる一座ゐい只今も中也ぬく
君のはせ立より」て彩江戸成長の今日を行きよりて
らせあいしや妾細ゐるべ「と」「おゐ主義を都老竹
川伊賀ノ介より為くやゐ入るべく世苛紙又牧教

ノ伊東が鍛ふ「世」打毋候滅野ある者ふ用と出奚
と結びあひ頭よ江亂世せしうどそ後ハ我又ま者と
世を思びておりまんわるべきび墓游と組刀と
添うまて若出生のおぐ男子あらば我世を出しその
時いかぞ保へ出して候滅野ゐい江時あゐり富ハ
まて往よあく青蔵せしハ別ち素母ハ青蔵の遠く
うて絶ようるく世をちく嬰くのお二がくは一ハ
育て」をそなたの歌青流といへ
仰けくるのでく楽ふ書ハ育てらまし成長の

とあり伊豆ふ月日紙差「り」が又教の流亂あるは
ゑ家を者ゑゑまび紙も初ゝぐゑゑゑ不濕くのか
三ち分まりて乞後師匠親鸞流を廣へふ法を弘ふ
ふ義具ふ及びと射系と病麻ゑ嵯ゑ乃身ち能く
の紙ある乃身ゑそゑゑて彼二ふと紙ふ濕ー經ゑ師
匠ち米ゑり「ゑ」び授りゑゑ伝ちて加ゑ師の名
と所紙ゑゑぐ法を遍歴ゑち内ふ於川伊賀一反ゑる
者が此二ふと授ゑて往生ゑ所へ出と毒ゑの訪
め慈止ぐゑゑ乃ふ乃ゑゑる往生下向荒場ふ細ハ初の歴

ふウ伊ゑゑる乃ち乃へ伊ー乃経の性ゑる乃伊授ち
ゑぐゑゑぐて迷ゑふゑ所へあゑぞゑ年三年おちて
めひゝといゑ世猶ち出ち後い系ゑ中用ゑ紙長
ゑハ乃細年より佛法ゑを毒ゑ教ち伝へ毒ゑ
ゑち毒べち乃の幸ゑゑいおゑち毒ゑぞち伝おち毒ゑ
と猶富ふ新ゑー伊賀ノ所と世猶ゑお勧ゑて御
乃ひ毒めひー此毒の乃下向ゑ乃経紙法ゑゑち毒ゑ
伝へち毒ゑ乃志ゑゑひ法ゑ毒の乃ち毒て教ち毒べ
中ゑる乃ち新教毒の円響ち毒ゑひゝ「遠ハ同隣ちゑ

天日坊
大江と
対決
の巻

何とも笑へども右幕下新敵の嶋よりとりまぎれさんたるに
宰相の使ハ既ふるものと無疑といひつべくもふ
俗く殺多の門勢石運ありとも若しうる時ハ又仏法と
ゝもあれ十戒を受ける新敵の落胤として往来へ
わらんふいうじを作るあらんうハ是我敵撃のこゝろ
又牧敵の恥辱とぶんぶ是よ俗く伊賀ノ介ゞ人を用ひ
借奉の門勢滅べ文を文ましせよ法夜と云あ門牙
ゝて第四ーめいいうぐ法夜と云ふる敵の出城刀と
第せんふ行ふ云ふるもの行ん俗べ弓鉄炮とおせあ

ゝ「ゆ」アそれいとゝつゝよ典猪毒べゝゝ「ゝゝ」ゝ柔が
義へ中ゝん此義ハ我君ゝ紅ーゝるゝ我くが
中村弓鉄炮とおせい今ゝ年の世ゝゝ木
第の弱蓋平敵の敵新変被ゝ毒べあまい若り
ゝ代あり時ゝ切の我君ゝ弓ゝゝんゝゝと思ん
の者を威ゝんゝ「ゝ」ゝ猪毒細代の猪ゝーゝゝゝゝゝ
ゝひー沢い文いゝ細のゝゝゝゝゝ逸楽ゝゝゝ
例ゝゝゝゝ用ゝゝ俗毒細代「ゝ」ゝ天皇猪敵と
関へゝる一義ゝゝ大納言と宰相ゝゝゝゝゝゝ

とりつゝ其一天日坊所都を知るべからずいへ
でも知まゝ多大納言中納言の上宰相中納言
の下ハ支経実佐と称へあるハ此外一品親王
王の石あゝ俗名細代の此条裏うらきん一条殿
遍照院の宮の此皆と元者へ大納言の友佐あくてい
ゝ多雑さ此を大納言も及ばざる宰相の友
あまべ此皆とゞゝ多雑き一品親王の此条裏り
ゝ此ハ此ハ是ゝいくゝと完年と冷泉へ廣
元と庵見ゝ及ばく行ヤ何典猶大江周清ち廣元い懇

懇英知の都ありと多く世上の噂ゝ家ゝ見ゝと
笑ゝい大ゝゝ遠ひじやあゝといつゝ来年ゝゝ七
おゝ行ヤ不行猿痛きゝゝでおゝうゝんとゝ遠目と
目及ゝ合ゝく噂ゝ知ひて天日坊ゝあゝふ流ゝうち
向ひ行ヤ何廣元ゝゝ俗名細代の家和のゝ知
ぬゝ知ゝゝぬい成ゝりゝく家ゝん相
のゝゝいゝゝゝ天ゝの此乱ゝて来ゝ此法ゝゝ大
ゝふ此世嗣ゝゝ時い遍照院の宮ゝ此世間と
此ゝ多ゝ知ゝゝび天ゝゝ家ゝん家ゝゝ此

彼方のかたを以てくわうこうぞくを定めるを倭
細代の山繁わと用ひ初めしてを友徳と称て用
ゆる具こたりうさるものを知らざるや我も正しき史籍
紀の屏風ありあるべし あぐ徳も是まことに源氏の
世徳をあるべきかうかうを定めるさうの道
楽院の宮の例をあるべし 徳を細代の繁わと用ひ
ちぐ僻ごろ徳しいかをもちいるうそ起美い廣元
行くく居丈をよいに居まべ廣元ハツと気を張り
是入をる保りある山繁へ廣元威徳結る山上に異様

の山二石拍刀をそく寄て平徳を天日指い仕
くく廣元と屏目をうけまづく上方く居来へ
本星興様をくく出金紋様一の二つの紋より徳様
の墨滑紙刀をそ平て刀をくく廣元漬ぐくく
刀徳りいくくまれ遠おぐりまれ君命とハかぐり
紋様をる山徳様みくく銀ひをる者紋様の山紋
くく者と銀ひ品今とのを紋の紋廣元
山のまれく切紋といる興様コリやよい美紋
をくくをいけをを廣元い刀紋んとする作

ふ天皇御押留め「イヤまた虎元猛獣と成ぬいうも
我へい霊のまと又へ対して出家の法うと者しうん
い霊を教て我又又の世と後で罪こんきゆけて
行氏でく宮動せい八つとでうり平伏虎元無い
ちうう良四二ふといひ中間を差て立てるよいう
ま成ま家厚鎌改さんと立て門出ち虎元
「イヤ先お待ちうませ「ツリヤ行用みく「イヤ現
ちゃ茶でいちうねど先ち器命ん成ぬ
霊を放せ〜ど暗りく御入ふ見れまうん

まうも仍ち和り結ばく為ばび行年行きの系
別ちて系第一ぷく差ちて「いうる孫ま系の八
ぬむ先ま方ど河ま仕せ「イザ入せらまゃうと案
門ふ仕せ天日坊本星悪伝ま別ち人部ま八廣
元い雅く見ちて次のち人ちまうん

吾嬬下五十三駅後編巻之六終